# 絵葉書の余白に

●文化のすきまを旅する

鶴見俊輔

東書選書

東書選書

# 絵葉書の余白に

●文化のすきまを旅する

鶴見俊輔(つるみ しゅんすけ)

1922年,東京に生まれる。1942年,ハーヴァード大学哲学科卒。哲学者。
著書―『太夫才蔵伝』『私の地平線の上に』『グアダルーペの聖母』『現代日本の思想』(共著)『戦時期日本の精神史』『戦後日本の大衆文化史』ほか多数。

絵葉書の余白に ●文化のすきまを旅する
鶴見俊輔 著　東書選書91

昭和五十九年四月二十一日　第一刷発行
定　価――九八〇円

発行者――小高民雄
発行所――東京書籍株式会社
東京都台東区台東一―五―一六　〒二一〇
印刷・製本――図書印刷株式会社

© Shunsuke Tsurumi 1984, Printed in Japan
0336-590091-5313
乱丁・落丁の場合はお取替いたします

# 絵葉書の余白に　目次

## I

北の果ての共和国—アイスランド　9
市民の記憶術—ポーランド　24
文化の胞子／リラ修道院—ブルガリア　37
市会堂の大時計—チェコスロヴァキア　51
スノウドンの山の物語—ウェイルズ　63
ストーンヘンジの時間—イングランド　76
キラーニーの湖—アイルランド　89
小国群像—アンドラ、サン・マリノ、ヴァティカン　101
白夜のラップランド—スウェーデン　113
二つの国を見わたして—カナダの居留地　126
四五年ぶりに—オーストラリア　138

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

見えない風景—ギリシアとトルコ　144
ガンジス河のほとり—インド　156
II
マサチューセッツ州　コンコード　171
牢獄から見たアメリカ合州国　184
交換船の地球半周—アフリカ　195
手帖の中のドイツとジャワ　206
III
黒鳥陣屋のあと　221
あとがき　233

装幀・勝井三雄

# 絵葉書の余白に——文化のすきまを旅する

加太こうじに

# I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 北の果ての共和国——アイスランド

空港から町へゆくバスの中から、地平線までひろがる野原を見た。木がまったくない。岩が多く、その上に苔と低い草がはえ、遠くの丘は青ときいろのだんだら模様のビロードのように光っていた。

それは人間が死にたえたあとにひらけてくる風景のようだった。

よく見ると、羊がところどころに点のようにうずくまっているので、どこかに人家がかくれているのかも知れないけれども、努力しても私には人間を見つけることができなかった。

八月の末にしては寒いにはちがいないけれども、思ったよりあたたかいのは、暖流が島をめぐって流れているためで、首都では、この冬は一日しか雪がふらなかったという。

そのかわり雨が多く、ついた日にも、ひろびろとした野原と岩の上に雨がふっていた。やがて雲に切れ目ができて日がさすと、遠くの丘が、青馬の背なかのようにやわらかな光を帯びる。

今は八月で、ほとんど一日中が明るく、北極に近いこの島の人びとにとって毎年一度の自然と人間とのゆっくりした再会の季節である。

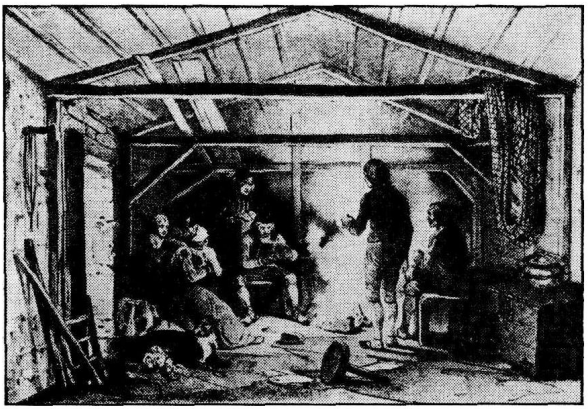
昔といっても、つい近ごろまで、馬でお互いにゆききしていた。今では自動車と飛行機があるからといって、馬をなくしてしまうということはしない。馬を大切にする習慣が趣味としてのこっており、家々にうまやをもち、小馬をかっていて、こどもは、長い夏休みに親の手伝いをして野菜をそだてるあいまに、小馬にのって遊ぶ。

それでも、いつも遊んでいるというわけではないので、道の両側にひらける野原のいたるところに、鞍をおかれず、のんびりと日ざしをたのしんでいる馬の姿が見られた。

馬は、この島の人びとにとって、昔からのくらしかたの一つの象徴の役を果たしている。ゆとりのないこの島のくらしにとっての一つのゆとりであり、自由な馬を見ることが、アイスランド人のかけがえのないたのしみの一部だ。

人間にとって、いつもあてにできるもうひとりの仲間であり、馬とともにこの自然の中にいつも生きてきたこの島の歴史の集約である。

今では馬ではなくて飛行機に大いに助けられ、ロンドンとニューヨークに、二、三時間でむすばれる。アイスランド語に近いノールウェイ語よりも英語をおぼえておくほうが役にたつらしく、英語を話す人が店などに多い。



19世紀はじめの屋内

レイキャヴィクまで田舎から出てくる人をとめた旅人宿が何軒かのこっている。その昔風の家は、屋根に芝生がうえてあり、芝生のある土がふとんのような形で、それぞれの家をあたためている。

昔のレイキャヴィクはどういう町並だったか。さいわい、一八三五年から六年にかけて博物学者ポオル・ガイマールにひきいられたフランスの科学者一行がアイスランドをおとずれたことがあり、かれらの刊行した現地スケッチが、たしかな手がかりになる。

給水ポンプのまわりに水をくみにあつまってくる人びとを描いた一枚は、今日でもレイキャヴィク市の目ぬきどおりの配置そのままであり、左端の家は今でも雑貨店

としてたっている。給水ポンプを中心として、日常の井戸端会議がつづけられていたことがわかる。

もうひとつ、家の内部をうつした絵があり、父親が何かの本（おそらくはアイスランドの民族伝説の本）を朗読するのを家中の者がまわりにあつまってきいているところである。くじらの骨でつくった椅子や、木製の皿なども、見える。

十一月から一月にかけて五時間ほどしか明るい時のない日もあるこの島では、小さい家の一部屋をあたためて家族が一緒にすごすことが多く、そこで本を誰かが読んで他のものがきくというのが、たのしみの一つだった。

その習慣は、根づよくのこっており、一人が一年に読む本の数では、アイスランド人が世界一である。

五日ほどをこの島ですごし、その間に食物を買いに行ったり、郵便局にいったり、図書館にいったり、道をきいたりというわずかばかりのつきあいをとおして得た印象では、この国の人たちは、ヨーロッパの他の国民、たとえばイタリア人などにくらべて愛想がなく、無駄口をきかず、それでいて他人の必要への配慮があって親切だ。

かなり歩いた上で見つけた食堂に十三、四歳の娘ひとりしかいない。その少女がひとりで店全

体をうけもっている。彼女は英語もドイツ語も私の知っている言語は何も知らないらしい。困っていると、うらの台所に入って冷蔵庫からタラをとりだしてきて、これでいいか、という身ぶりをする。タラのフライと、それからじゃがいものあげたのだが、一つ一つ、見せて、客の確認を得て、無言迅速に料理する。

本屋でかなりの本を買ってもちはこびに困り、何かに入れて結んでもらえないかとたのむと、この国では包装用具などはあまり使わないし、紐の余分もない。待っていてくれと言って、店の娘さんが、かなり遠くまでいって紐をもらってきて、しっかりと結んでくれた。

ガラス戸ごしに、ビルの内部で会議をしているのを見ても、一つの課の会議の座長を女性がつとめている例に何度も出あった。男女に上下の身分をたてるなどしては、ここでは仕事がはかどらない。全島二〇万人（そのうち八万人が首都に住む）しかいないのだから、はたらいている人の上に、特別に偉いはたらかない部分をつくるわけにはいかなかったのだろう。ソ連などのような社会主義国よりもさらに実質的に平等と相互扶助があるように感じられた。

総理大臣の家というのを見たが、小さい平屋で、他の家と見分けがつかない。

島の記録映画を見にゆくと、そこは三〇人入ればいっぱいというくらいの映画館だった。そこで一九七三年のヘイマエイ島ヘルガフェル火山爆発の実写を見た。町の人びとが、他の町の人びとに助けられて脱出する。すぐに総理大臣が現場に来て爆発の模様を見ている。なにしろ数十年

前には気候の急変のためにアイスランド全島の人びとをデンマークに移住させる計画さえ考えたくらいだから、世界最北のこの国の全体をいつあけわたさなければならないかわからない。そういう危険をいつも心において一国の政治を考えてゆくことが、この島の政治家に、米国やソ連、そして日本にもない、想像力と決断力を保たせている。

全島第一の都市レイキャヴィクはその全体が温泉によってあたためられている。もともとここは小さい村で、一七八六年に町として認められた時にさえ、二〇〇人くらいしか住んでいなかった。第二次世界大戦以後は、飛行機の便の発達とともに大きくなり、今では八万人以上が住むようになった。ここでの生活をするために、一〇キロも遠くのほうから温泉の湯をひいてきて共同利用を計っている。

町の中には大きな野天温泉プールがあり、そこで青年男女がのんびり泳いでいる。あがるとあたたかい湯のシャワーにかかることができ、そこからはもうもうと湯気がたっている。水泳は、乗馬とともにアイスランド人の好むスポーツだ。

首都の東一一七キロほどのストロックールにはいくつもの間歇泉がわき出ており、待っていると三〇メートルほどの高さの巨大な湯の柱がたつ。

まわりにかぞえきれないほどの間歇泉があり、赤ちゃんのように小さい温泉が他の大きなものとおなじように一人前に湯気を吹きだしてはたらいているのが、可憐だった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com